さかのかい法

へ 13
1308
1

本清

雲迦耶麻羅仮寝の叙

一大乗経年一吠陀二十六多世界の教を
釋迦元尼世尊を事分へ給ふ人〻
雖も紙彼初年の煩ふ所で熟〻思
ふに実中慶大元なる仏の意趣を

門 へ遠13
號 1308
卷 1-6
明治三十九年一月二十九日
水谷弓彦氏寄贈

無雪続て、麻も果る著作の徳
再び起るとやなん。見未なるも
揉て清涼の芝の栄え、悪路なるの
間に帰り給へ湯治をおもうかぬる
繁華に繋るの印度にかくの御
その性のたゆる一條は寿ぶ書物の
風趣ふかつけ自然、玄味れ会ざる

とどかんとこえ戦作の徳
年ゆるして四方八隅、遠き他郷
浦々佛の教の違らん限もなく
ゆるして四海の外紙幣ふ
霊祖業ハ二度の紅なる南蘭よ
年を揉て

株著生氏あ年ゲ誌

摩訶陀國の
淨飯王
淨飯王ハ
北ハ
大多屋
大右衛門

善覺大臣の
女兒摩耶
夫人
摩耶
夫人
麻耶夫人
於
擬人
本文ハ青龍城ニ
両個夢の奇瑞
あり
この編ハ
桃の節供ニ思ひ
図らぬ奇縁
一時齋

○烏將軍小比丘
於耶麻
傳人
烏吉
橋曇彌
小擬
姥女兒
於橋

○烏將軍
小比丘
於橋
傳人
千種育功卿

雪廼
耶麻峡の

嵯峨の假寐巻之一

東都　松亭金水編次

第一回

そもそも人とはなるまでに。世の益ともなる成貴しき。尚術の益あるべしと。流ふせを貪りて。月日成仇ふくるまもなく。俗ふつゝ教潰しして。天道の罪人なるべきを。稀に致い天人の上を祈りて。美なく。味ひい巨万にして。万万両の。分限といへども。世界のうえ

ふい一本の松杉ふも劣つまぬべ。まとを沼てこの冊紙を
人一心の爲に祈ぐ〳〵さん。と昔の人の語と稱
し。神祇釈教恋雪。嫌さまで浅さまでこう入き
て。稱き人ふ引解と肯とし。紹つまげくるまの意と
ぐ。かの婀娜めける風ふい紛まと。その意味中〳〵ふ深
けまべ。く氣と爲て祝ふのうんふい。邪正とおのづ
う。曉まるこの爲こうん。抑むし孤金四祈。繁榮
の内ふあるうて。きの下ぐる米町い。今大松金の本町

石町。あるひい日本橋。後のごくいと張へる祈られ
べ。大商人い彩とあるべ。まぐ夜も明ぬふ彩と送る車
の碾ぐまる人も。孫耳ふ記くぐるう考う。この一町
と一構へ出て。孤金いあるう関九八別。丸羽奚引へ西く
ても。角とあるぐる人の為。大多屋丈右歩つと
ふ引限あり。さまべ地西八百嫌簡祈。まぐ近社
の田地田島。質地と貸ておのげる流まるこしも
数百石。実ふこのむう宋の世ふ。石崇こへる金相

あり。彼ぶ剛小伽羅を焚き。且孫繡して孫小綾小。
縫物をして裁縫もなきなり。とこの一事をもて世の
人の家の富貴のさまを式案べし。そもいつの世の唐
土なるか。そもそも小も傷る大多屋に元とまつりたる
者周小て。かゝる富貴を羨む人も多きなり。
あるゝ小今の丈夫の妻つい近来家智してその年も二十
二、三歳小ありけゝ。緑をくしして完まる。澤家とよ
ぶもあるく然して白き性質まとべ大磯小磯の遊

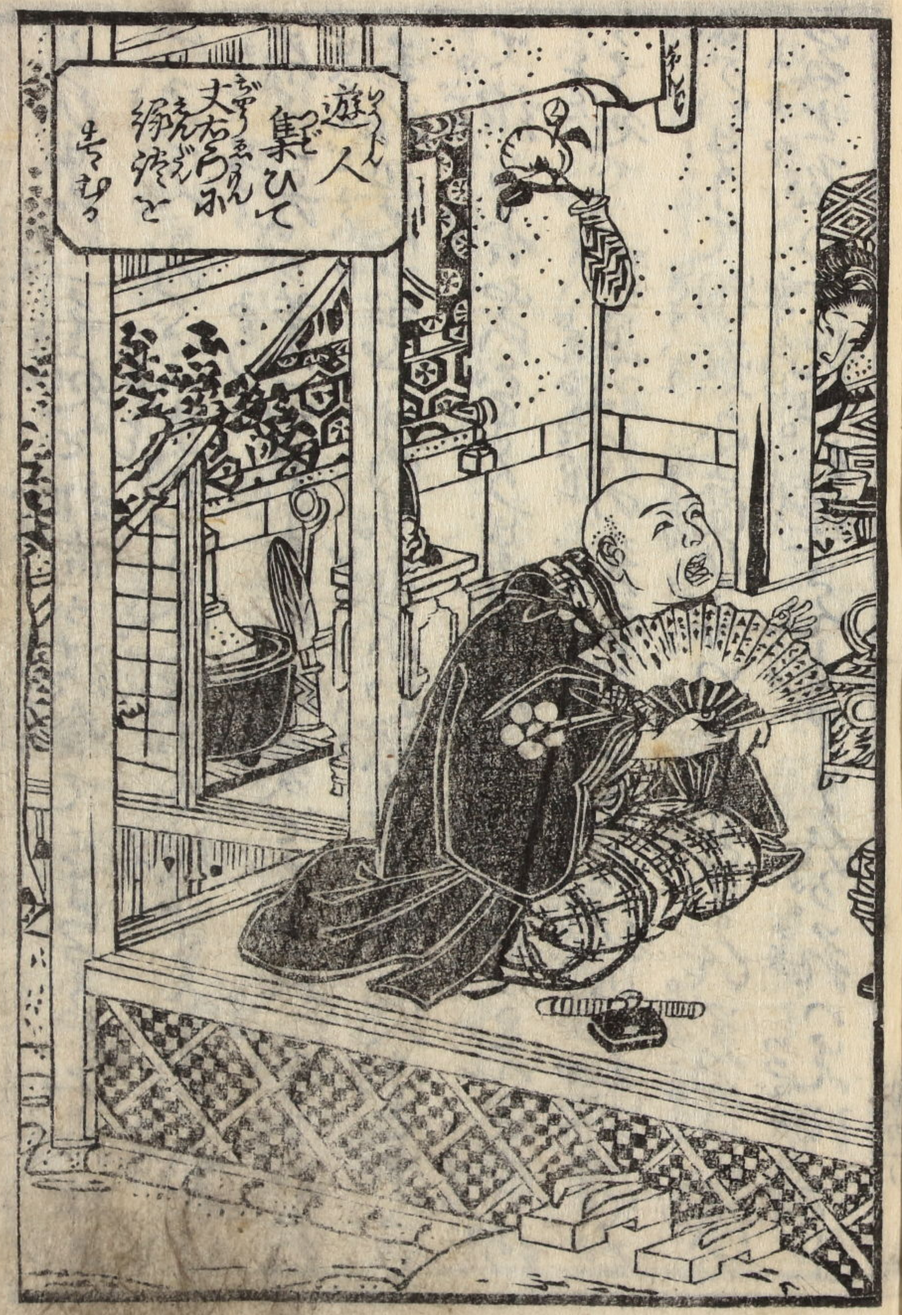
びもせまで。況て侍女野女い。多く仕へどもつけで。ナで
ゆ多小雑婚菓の湯。まさい挿花その服小。有金ど濃
て樂ととり。さゝ小浴るといせば。とふその家の支
配人も。多きぶ中小多氏友個。家小ふりて八月小
も。多しとひて一人い月小家ふて実小来つとも。
浴い月小比して。桂義とあん味けゝが。一内友個徐金
し。妻のとを勧めけまど。まづさ一妻る孫金小心小
恨ふあもふして。その張小ふるふり。との家を出入

するなる。万識所甚楽掛死所一者ハ。気ニかゝる所ニこれ
とりて勧めんとおもひて。かの衣個の文死人容よせられて
わむひふそかの衣個ハ弟郎して。わがとうえあの世「モシ旦那
顔おかげ。貴君の聡明叡智ふつきてハ。君家ニ
チトうしらぬでもござりません「アア和尚聡明叡智とハ。
大道ふ精あげしさナ。何ぞ工音微がつきしわく人よし「イヤサ
然でもござりませんが。諸方ろう被遊了。君家が存じさ
計りでも。又わや七わやアござりませんが。何様いつ秋

で御縁をおさらぬ人のでござりません。夫も相縁奇
縁ともうします。先きをと御覧なすつて。お気に入つたら
やア診方もおしだが。左様もおきらまで御所アまア。ど
うも愚兄に解せません子「いへ何ぞそのそろ。十三眼
らアお様も岩かさて極致ハ右も左も一世連
坵しの月にやア心どてが肝んどが。どうも今の世の
中にやア。心どその首のハ〆ど。その処でも中つまらぬ人。
命を捨て旦那に。心を労ても愚の多う。と思つて

まア〳〵又合せて居るのサ「そこやアもはなし長遠ひご
ざいます せんぐ。丈うこそぐ人の場で。とこやアかつて。
まん人テ。丈ぶ〳〵まいりを旦那。初おすつちやア仕様でご
ざいますと。長元ぐはんど。長元ふつて。人。先も陸を宜
家敷と。中こうてこの家敷の。百分一ふも。家こまません。
ソレ半ゑ者も出来の。る場町の。長物屋。おすこの女児
ふおすさんこと。年ハ大こと十八ゥ。九でこざいます。せうぶ
丈一内場で。琴こ。三味せん。もよく。長ふ。さう。計線も一人ふ。

中〳〵殺明で。撰致。中さぐ。目鼻ぐちいよし。色白し。
髪ハ。るうこぐ低〳〵ぐ。何処へ出しても。立派ふ女児
ぢ。そこで彼ふと何こもく。はぐ。垂て。立巻。動ゥ。寄
ふと。笑ふこうと。出来ふすつて。出来ふ恨つて〳〵改めて。
まうし込ぐ丈つ〳〵ぐんふ。新ぶう。長まません。尚ま
と出来ふ入つませざア。長物でもお遣おすつて。お返
長おすつても宜ございます「丈ぢやアふ。長妾。関係こぐ。
荒拙。長ぐ。影。ふ。工「十二。そ処い宜やうふ。長元ぐ。


遊人
集ひて
丈右ゑもん
縁起を
ものがたる

らひまして「そこを和尚が清食てくれるやアたれ」
てえてへるのご「史ゑ」今晩ふも清ドませうト嘲と笑
居る一聲が莞示として爆笑とともに「そりゃアお
ゑさえご云ケ
お粕ハ大家ごりのヨ。乗ふ妻ふあげ稲へうと中こロ
て。酒も呑やいごぞうません。今のい嘲しやアるんご言ハ。
そこ処でるモシ貝ハ。私の家ふとも就ハい系屋でご
ざいまして相変ふ。商ひもいつさまん。美管ふ清で
家士屋の女児ハ。お蓮さんと中まんが。花い見頃絵

も取まして。そ化の盛も五ハて笑用文のこまらぞ
探数こ中すば其楽先生のい新しのも。ぞうの美しう
ふ。ごぞいまんが。系屋の女児ハこの頃金でも一こ中
て二ハあるまいと。人も嘲といこ先。アア行ふ。ろこの女
児とも。一家ふハ呼びふすって。ハ清ドまして。私
ガ絵現といこ中ば世も変ハ。ごぞうません「バテそうやア
君ひの形。武許も美しいのガあるんご。ぞて。ろこと
自己ガ宅へ参ゑる来る奴ア。食世君の様ッちらしう

一個として淺草の西の奴ァ杯ノウ和尚「ハヽヽ大抵で
もござりませんお侍女の業淡小義吉世年いきるぬ
けどもちゃ仕の彩孫ちんぢァ。モウ二三年立ちゃ男
殺しとゝ新道ふ寄りますぜ〳〵「大抵サ九ふ業氏
あんぢァ娼妓ふでも寄ァ打つけ殺義持旦那仕
でせ人淺草ふ西で稲へと元作〳〵どうも困ると咲し
ふ無も目淺近く今嘱ると業淡小義吉「旦那さま
出賠ゲ出来ましと「大抵ゥ何で格へう「ハイ出月と
まぢ外ふ行きう拵へて居ましと「大抵ゥ夫寄ゥ娼と
漢て一生の支先生へも献しゥ宜「ハイその稼りふい
ましと一大分如社寄くふりさナ。そこでこそ旦
那へ訳つて来年の去い自己ゲ引るぢ楽ゥふて
候て居ふ「ヨヤ番ふ楽さんぢ。ち内義さんのあ
僻ふ「ナニ先楽さんう気ふふさんふ。あるちゃァ去の
年城の晩ふ西の海へきちくと。遣てもまふう
大丈夫ぢゃ〳〵「西の海と人ベノウ和尚ふ出る拵でさ

が、ハ拵屋へ俳諧より働きぶあつて面白やまぶ
茅舎ハ鬼の云ふ事つくんと出来ぶ。ぶと茸く考へ
さぶやァ和人ぶ。俳諧師ぶやァおぶぞわんぜ「ハ、そうやァ
まぶ云。先のもぶゴロは。老人ぶる位のぶ。ぶへ出さんいとこま
せん。ぶぶ蕉風とまぶうまぶ所ハ「こまさく」その口訳もモウ
陸ぶ出ぶるョ行ぶでもその道へ追入てこまぶ面白く
和人あへ拵へ。ウ一考ぶ拵ぶ。おぶく出ぶぶ。ぶぶ
ぶア「さやうサまぶもぶ。ぶく云ぶてまぶ限ぶもぶ

全体ちんと一枝を折て。瓶ぶ挿ぶ。その枝
ぶぶのまぶまぶまで。気色を見せて拵ぶ。初ぶぶと
まぶしぶんぶ。そまぶと今のやうぶ。実程ぶ曲ぶ。殊よよ
ると汁ぶぶとぶて。撓るのもあるとまぶんぶ。実ぶやァ
九で遠ぶ。紙師。矢張竹のまぶと云て。紙で拵へて
ぶぶ宜ぶぶます。ハ、ザノ義。樂さんぶ稽ぶ出ぶ。
些行方へ影て。お影ぶ「ヨイく出方へ移ぶ。
ぶぶ気者その外の。拵ぶぶ人。拵出ぶる酒

と殺家業の家には飯のさきに猪くの皿を並べて。六七品は透る也。周て食前方丈とむかしの人も称へけん。その大名家もまたはその豪奢にせるどもおのづら。諸親類やら出入の者。世話しきものあまたへいれと皿物かくと盛り紙を畳る平生の会にも。二三品には膳を並べ。丈(一)ウ、よく猪が出来ど。サア友先生側のさかな。其美味の物は稀へけれど。意を悪くし小きて。真にあせへで世一なり。後を悪とするものぞと。養次どんに可恐がりまるけれど。猪に立せる計でも疲れぐで。どうも新造に番ぐらまる奴サトとまでより気楽一番は侍女どもと対手にしてゐる廊にされより銭からまことこれもこの社の一興と。底抜上戸をたのしみつゝ

第二回

さも道を修すとて又桑門徒を修むるとて又儒者先生も家貴には傾くなる。況て底下の凡俗は是を貴ぶも皆いぬつなし。こゝに放てる場町なる荒物屋は気楽

まう。このことを皆と等一。殺べと大かさあべ。妻児お泊
ふもいひ出せ。どうしと思殺美でいおいう。り美
へ行はまでも。笑ぞ小屋よとかりふまで。いも〳〵こうて
その日を淡つさてこのお好い年の比。十八う九こそ
楽まう。猶辺ときどその実へ二十のうへと二ツ三ツ。新
のこう人まべ。男を扱ふこう人まべ。かの海宮のま
娘ふこそ。顔貌の弱やうさふ。年も二ツ四ツ陽とてう。
されば雅変へねど。彼処へ男べ行振てと。物ふ祥〳〵

又更こそおすりう。親も何こそ貴尾せんと。年ふ似げ
ぬ華美衣裳。こそわざ丸と前として。十六七と
も化さん心ちと彼美変少路なる。糸屋のお蓮へ擬殺
こそ。おなふい些傷りもせず。名ふ教こて蓮家な
ぬまと。かこる大家の新婦ばふへ。ちと向がこ風情を
こ。縁て一者い新方ふ。親ふも変こへ出せ。お蓮と
も屋敷。新てのこと現然ふ。たこまでへ先の機ふ
いこど。貴尾すこへ親兄弟一新養こふ浦む。

大事の所とひ改せ。その沙汰を後けるふ。須臾
月の中空ゆて猶の光ひろうゆど。四方の山色ハ殊こ
め。少しすぐるゝ枝ぶり。まゞ数多る梅が香と。ゑさん
堂賀ゑるく。庭の弱草もえ出て。まの光も猶
その八日和もつゞき所より。とかの大多屋より案内れ
ば。二人ハ時と整ひ師匠。そ楽一巻そ〳〵の様さし
別ひ大多屋の。裏の方より徐と入ゝ。その一家の人さ
へも。知らぬあり知らるあり。かくて丈多つが指揮ゆう

一ハ所ふ。亜のも知行と。まづか好くべ南社家屋敷
世新と。庭ハ常盤の松の色も猶
か蓮ハ屋号より北ふ。庭ハ常盤の松の色も猶
まぬ。る野桜。黄楊山茶花ゑど。極く種てゑと。
所ふ。ゑさ心利る仲居の女ふ。侍女二人ゝを使け。家の
亜物その北の。餅てつのさ人家ゆて。待ふ人ゝを
あだり。孫く。だゝと。この家屋を。類縁てで居ゝけ。
かくてその欲ふ。ゆけ。酒ふ殺ゝ。ふ稼だり。侍之

させて待かゝ。らう運ぶやう南紙しきのおなぐ方ふき
樂と煙草入。うち人共出つゝ入来る。おなつそまこと見た
ちうも端ちく出迎へ一緒ふ居まゝ。そ樂を
おなが側ふ居て「こまゝの樣ゝお噂をいたしこ。おなさん
と申し婦人ぞうぞ山来お目をかけれてやさうまし」「是
様うらぶまと遠くふ。ガア。おなとゆうれ
方へ来ふ。和尚も今頃ハ一ぱとして。かるいまゝ酒いで芸ひ
て人。初ゝ祖へ訴へ共一個。この壞もさぞるが恐らう。さ

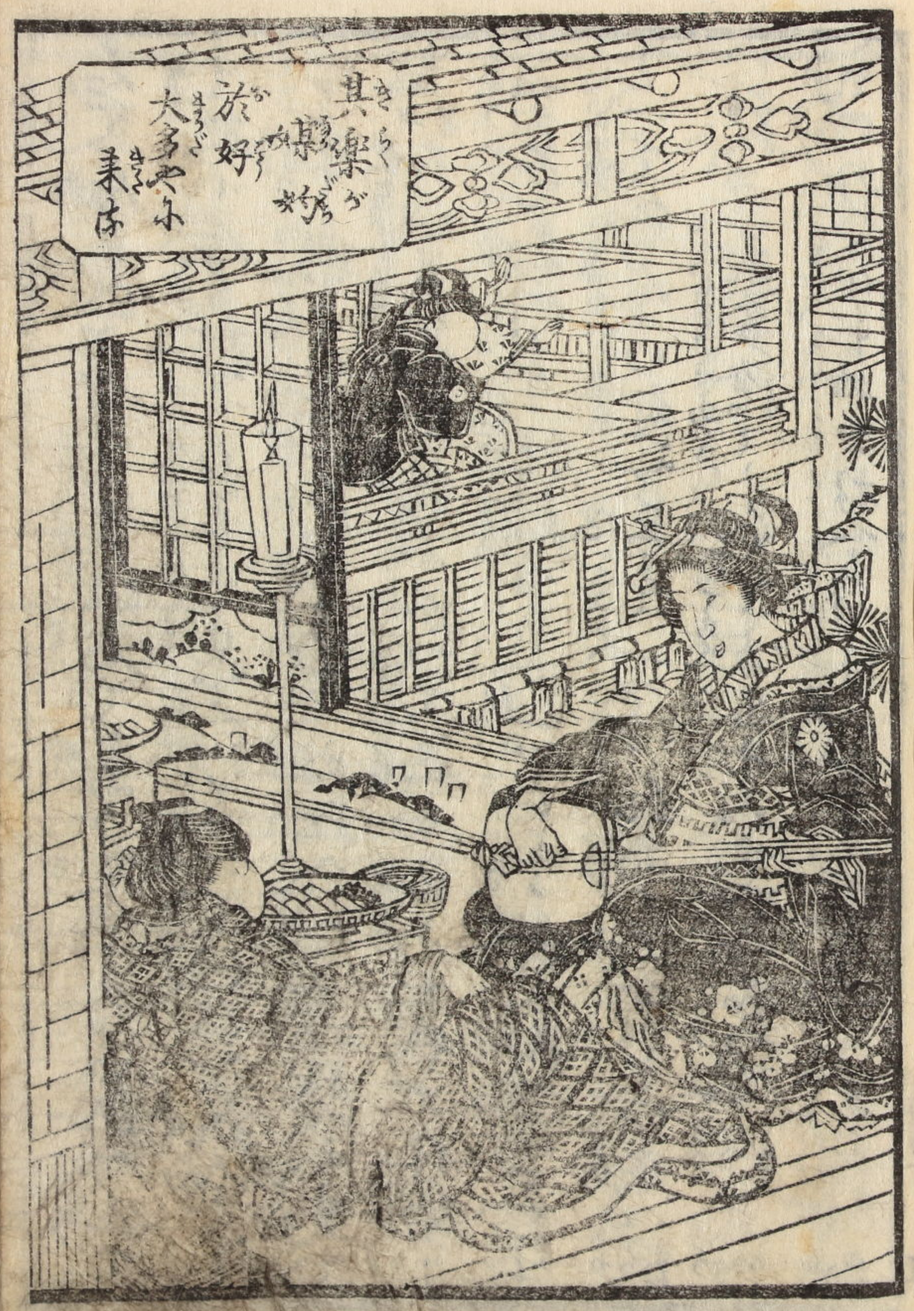
あ琴や三法も。よく出来るとこゝ。
住家てある三法と指て来や「ハイトいひ」て立て行「芸
行ふ。ろ始めやう「行でも法ゆ酒のゆ。ろ歌い義絃
も居るけまど。おなさんソレ旦那へ「アイ」とひて待か
ゝ。酒飯とうけとう歌とする「下キニ」お自己の彩ぢ
ヤア。そ君とい人ゆアア法度ぞう。喰て人と君ハ
そと君ふ。ふ喰つこぞ。美ふ。て居ると代
で背ぐとまてあ人「ナニ」恐いとません

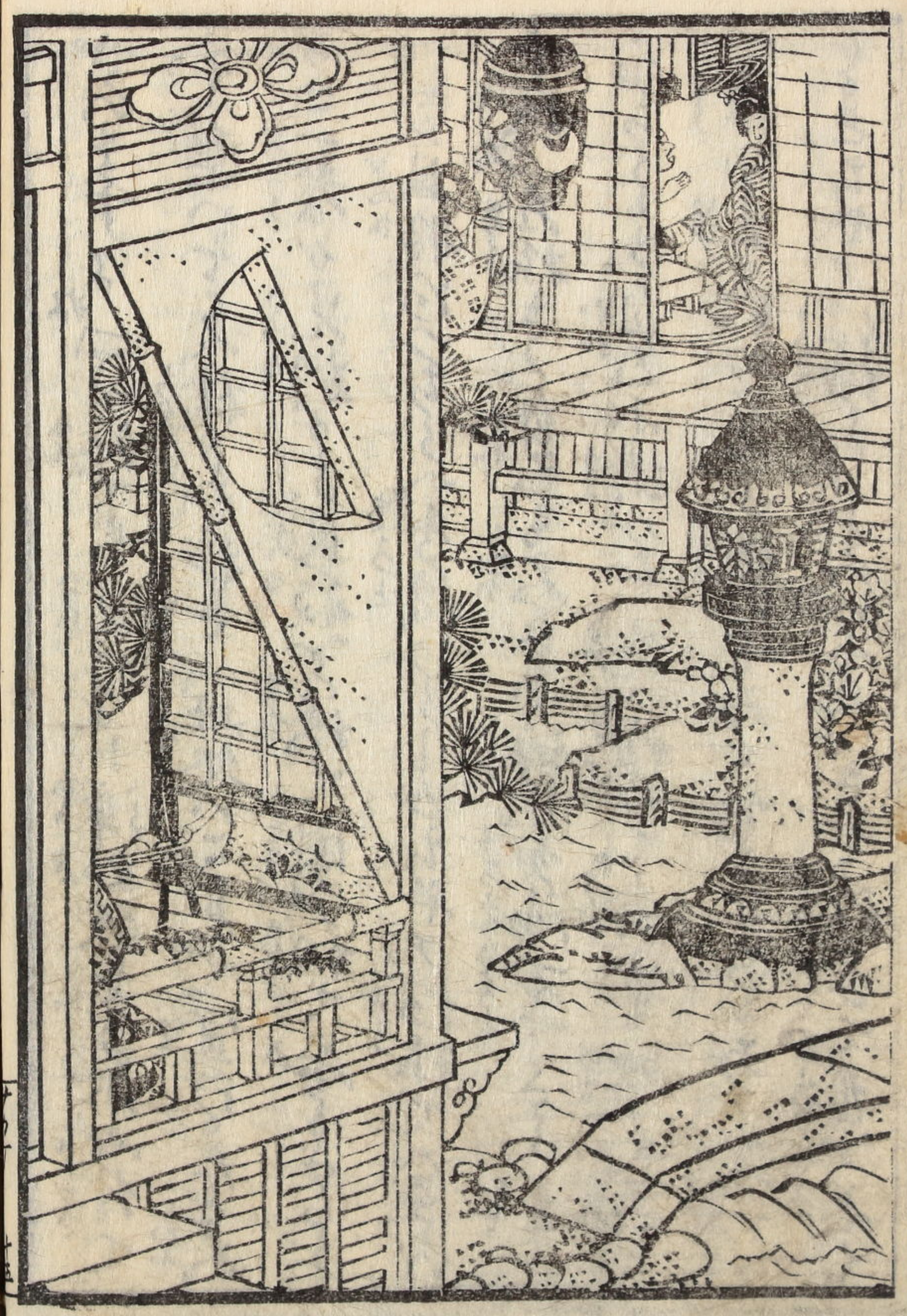
あるアア吸物でも吸ふぶ宜ハナ「サア」いなさんちあどんか
ぜエ実ふ且ハハイノ〳〵と云て考へる人ハ居ひサ
まだで長老おんざア・考へ悪ふいろ〳〵・どうも出云ふ
悔ハれ人〳〵〳〵和尚ハどうでモウ性を考へて〳〵見てバ
宜と思ハともあるぜアハ〳〵・あり〳〵史でおくいちやア性
れ人山根お甘味くれ人さんでも・析角喰せやうと考つて
出ようう吟をれ人と乞ふ有るノト見より盗喰逆状
きゝ〳〵で必ず小牧も考へる見バ・考へ楽も今ハ十手解

て「イヤ行ハの名ふう〳〵法ガ来てゐる。サアおなさん行
で一曲〳〵云てもまい面目のものハ裏ふおちる。矢張考へ
ろ〳〵深張り。俱ー今流行るチョン〳〵節ろ〳〵「ろの浜へ
ふう〳〵ふ唄ガ流行ますれエ。矢張端唄ガ宜ぶぶいま今
丈東「波も今ハ大ぶやうで。諸方へ師匠ガ出来さうざ見
も大ぶ浅〳〵ハ流ふもうう考へ「ちりまん狂う
今で世人浪花ガ遠ふのと云沢ふハ。昨ハぶ法輪ガちゞん
まん丈おなハ稽古でもしてゐるとう「イエ十二稽古ハいろ

ませんが。ホンノ独ごとで些ばらう「何ぞ新しいのを生て呉せろ。中ホヤア陸ろ宜のがあるぜ」「縁ゴ出来ません」けまど。何ぞ深ませうト合点して調ふも二上りの。ろれも柳柳ろ。あの一曲。丈右衛門つい安物を肘と杖ふ暴れ狂びて「どうも結構ろつふ奴ア。何処ろ呉ふ宜んざ。コウ重宝。今度ハ丈右衛門。お好一つ深て来て呉ゐ」「サア お遠ひ何ふ。ませう」「私い深ふいろりません。つぶ物ろ ぐ見が。雪い尾ろう。そもそで。まきやア。丈右衛門。

ざのまずろ」「マア何でも宜いまト深出ん。そうふ心付て そ楽ハそろ人稽古をおき「此処ハことで宜けまど。大 うと一番ぐ先刻ろう。旦那ろ接て。周り切て居るざらう モシ旦那ろつちろへ。多淡いろークちやア。何様でござい まん「去様さ。良色も大きふ辟さ。勿論万一ろう重く ぶらろろ。良色ふ構ろで。先へ指ろて。食ふも吹して呉と 一番ゆ出て。おいてろう。周りてあるやごめとも。あ人「ハア そそまでやア仕細ろ。よろいろ。あくさで淡ろ。ひて。貴と書く


其樂
於好
大多
未



まで居まんぢらう。居ぬ後又て来ますといひて立て
出ふ居る。伯母様ぢ「ア」て。廊下伝ひと行んます
「アレ」樂さん何とかしてヨ。ヲ姐様へ「ヲニ姐様」と。見て
もおかしいるも。隠居ふ居つて呉と云さぢやアお人ラト
あらで居りう抱様ると「ア」樂さんアレヨウ引
と一生懸命の騒ぎ。「ハ〳〵」和尚ぢうでこの騒ぎ
いお人。ア。「ア」強〳〵。ヲ方も十六ふ居つて。何ぢ色
れのお人ラのぢやアお人ラ〳〵「ア」でも坊さんの御ふ

ふざけまんあヨトノ合をふり切てピシヤ〳〵と。樂ぢ肩
と七ロ八ロ行ぢう逃てゆく一ツアぢうも彩造ぢ。乳の溝
のふやアおそまるト。揚ぢとひたぢう。業内ぢつうる北
斗家。廊下つぎふ窺へば。一巻いきやよの様様で。右も
チトまうる教伝「お蓮」さん。音曲の残りをカウチりぢアぢ。ま
て猿いた。ぢあてまぢ。ぢ。今ふこと〳〵ブト
てえ。ア。表面見ふ。ア。お人きやアあう。お人ト。遠つけう。
て「蓮」音曲ハモウ。最ハと。行ぢう。教ぢ火こうて。

さぞ者〳〵ふつとらうつコト傍ふる仕事の方へむけば「イヽエ
そんなでもごぜゝの日そん一番さんが波ゝ方ぞうゝ。モウ「ツ
あごつとキナ「ヱ二の報して傍〳〵と思いヨトいふ折隙ふ式
ぞうゝてと問て「更ふ〳〵一番と思うまうトたき合契
でつゝふ悦り「や旅ごと思つゝう手樂先せ行報ぞエ今
秋旦別いとゝ人は某隙い報人理屋ふ「トつゝうけでもあ
つまゝ人が。まぞ波方が「仕〳〵ふ〳〵「なまうび婚あうと
つゝは名ごゝう。お蓮さんと対せで。きつさ訴ぞ先へあぞう

ぞ者徴ひゝうが大敵打チト半先ふ軟ぞまう「イヤ
ゝゝも先刺ゝ矢張一個でモウ〳〵洗ゝ処では方
の四動辞いどゝうぞゝと名つて窺ふのぞ全体ノウ一番さん
秋四二人とも月日とァ世三岩ひつきぞ乗ゝつて端ふ者
ゝゝ世方へは出ぞ報人ゝも先まやせん「大報ゝエ
ぢやァ波方のきゝふ。大分面白ぞゝあると人ゝ「エ
名報でも報人ふ。今堪喚ゝ行〳〵婚まつてのサ「一番さん
文ぢやァ旦那ハ。モウ出ハあゝまゝハ大報ゝと云て

今ッうし、孫ら是も右まいうし今秋ハこ人泊らうか、ア
蟹ハ茅と縛て行ぞうか後が霧屋でつけ玉い茅を縛て
も宜らうれエ「右様サ能長エうう。ア、いよく出
ぐれ人と捕つやア金井ろぐのサ行ぞる先生その所
ハまぐ宜うと右是め人う「右様サモウ大概ぐらう
ドレ一盞頂いて寝ぐ動静を見て来やう「行平
ふらうあう左様しも異ふせエその釈ぐうう拾へ
うう殺もこの色で流でもよい若ぐふおくぐ

つあ、ふぐれ人とあうやア。ふ敬の子供ふも待させ
度。そして お蓮さん後へどうぐ。行ぐう、ア菓子でも右様
いまこ人一行うと待ううう後も宜ぐるを多さうくとい
菓子も。恐うアありませんねエト笑る仲居ハ御ふ五
銭の酒後ふうう。歩下ぐ楽ハモウく後ぬとぐ
人どうア人の俳。まこ是ふ盞ふうて「丈ぐう一者さん
彼方の動静を考後ハ入て来う申せう「行平
まうしやハトつまて途ぐ処と出廊下つまの南れ

舟家へ。ものとバ行ゆきうこ二法の。ものさ人絶て陸ゆハ絶
きうと。出ふてゝもて燈火ハ。モウ片付て一個う丈個う。房ふ
入うる勿論なうこと。いと淋しく引人ゝ。ゆび今ごと。体と
と。侍女どもがつふふう。法いち好ゞ礼ふ入さう。と。ものさ人
続き敷びて。ものこと立ゆう奥と。香と。房のやうもも成穴敷び
けり

嵯峨の仮寐巻之一終

嵯峨の仮寐巻之二

東都　松亭金水編次

第三回

春の夜の夢ばかりなる枕と。脱ふ古人も嘆ドけん。
現ふ如月の中旬い。春秋二分の時ふして。昼夜等
しき長さといへど。夜いなるく。ふ短しゃ。ア、辞て行ふる
ものゝ。一寸入やうもしさ。行の時ゞ。ハイまゞやうく。子刻
位でゞいまゝ。宵ふ出ものと。右拍子仰ものゝ。

鮮ふ大も堪まりて。乃酒も一盃もうけ出て。おきまりと
モウ一盃ずつ。あがつてまいらるゝ。亜孫へ。あげませう。「お拵
さいまちの義ぐらう」「ナニ。お拵こまごまのもの。沢山遠慮
いたしません。サア一ふく召あがつて。世間待あてをせトいひ
て煙草をつけて出す。後を送出て設きつけ。浮よ汐
てまと泡。次の間ある火鉢の火を。かきて乾して帆立
貝。その煮汁さへ近ふあり、焙も出来て器ものを
拵へ「サア具足出まるさ「お拵ら大造ちやいノウ。何拵
ちて。おいの拵器用ぞ。例毒所へちよいとさの
と。分付ても。ものがれて。モウ。おふるる。ぬる。粥
て来るのサ。イヤ。ちやア。お妙〳〵ト。床の上ふ。起出る。
お酒の他ふ人も。なく。かの廓中の。陽よ引ぱる。まる楽
むそのさまと。拵ふ。拵を。丈ものつい。とまで上ふ
き面白さと。現心も。おきまでふ。故つ。別へつてかつ。
顔の更ると。ものぐりけて。其楽ハ。陽子の外ふ。踊
こそ。ふ。勧盃を。篤と。さても。大前尾こと。

の中ふ飛び〻。かの北斗星へ来てうせんとび。ゆるを刈て一孝い。財を抜よ。孫娘びをう。お蓮もいふ弟さう「孫さ。ゆう

一寸戒くらくと。腰を寒つけたぐけたく。菓子さえ喰お

まえ。体を揚枝と巻つて居しが。そを「うんうう」甚ふ

さん。お出いあうまてまの。今もこの女中達が。家もこの

間ふ伸てある。孫さう冥らうとらひますけを。ぜうう孰

静のあを合いのふ。孫て仕舞も悪いう。ちちの接拔ゆ

て居ョ「さぞ」お待をであうまーさらうョ。弟俗も仰拔ゆ

て、お達を合ようさうと。大きふ文句を取こけを。風邪も

今頃の大道ふ。お辭おすつて。苦ーがつてどざうう。宗理云

体ふ。おつを中ても。ちいあうびや。アア〻。稼ふ。孫がいと。今。お孫

してゆて来さとはうう出放頭ふ合せ「去拔てうを」ば頭

も要さう。世も。ちゆくい。お孫がつて一孝とも揺ふ。仲居体

女とのもぐふ。世話をおいゆ。お蓮と始あっこうりーと憩うせこ

つ。実ふう後一孝笑其樂と始め例仕人ある。年増ちち

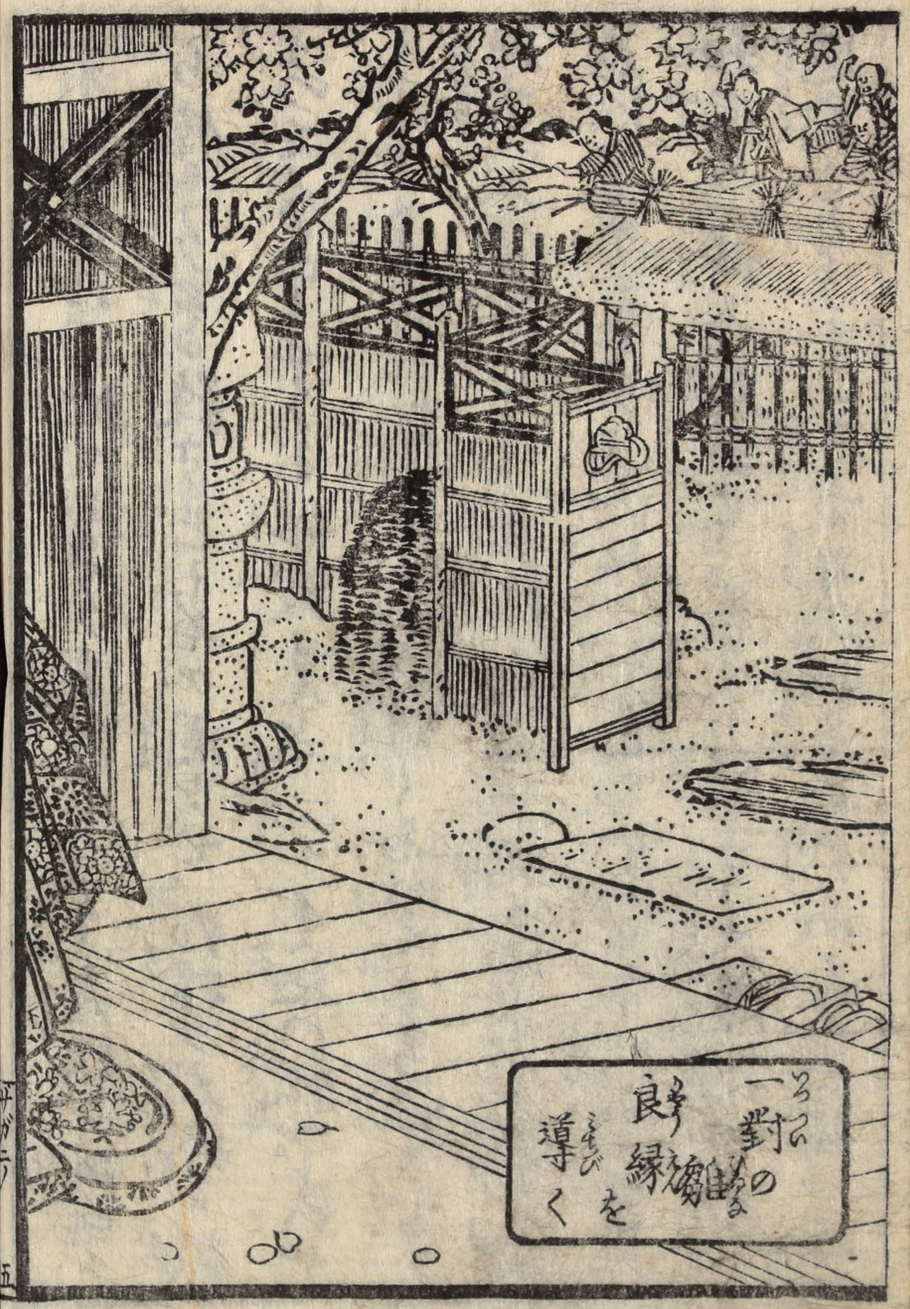
も勧めうて。お蓮ゴ方へも丈右を。つの来るやうふ。けを。ど

右大蓮寺の僻事とぶ。丈右衛門が乳ふい恨つべきことバ
ちのひて始めこそ。そ挙動と花けまどい好もきのこと乳
ふい恨いぞ。今一ごん乳きとある。如もゞ忘と忘ふてそう。かく
てその月下旬ちゑ月ハ稍春色と成ふて。日も暮ふう
ちかそこ。ちゑつこ。ちゑつこと笑花をりえまどんもう乳と
つぎろう月もいといとう長けまどい去年よりして流れ込で
る近在の田地二千石。後家書物ふて去まてい去まど
えらふいきぬ節。近きふ巡のとあるべしと実右衛つゞ

つゞふくろ。さゝぞといひて紙の袋のごく。供人の准備させ道の
程の無為けまバ。其楽をも伺ふんと。頃ゝ如月の二十
八日。遠食をもち出て。国出ゆる陶後の宮。是柄
の下新田地かゝるの立代の業用ふ大きく巡て後ゝ
日ハ別桃の節句ゝて。新も国ド猿八中ふも富
家とゝて。落ゝ立ゝる雛人形より。彩の綱度ふゝ
ゝまで。子ふと子ゝ。金銀張ゝて蓋物まで。ふゝ芸画
玉候美人の続びと。天ゆゝ左ゝの在さ衣ハ。桜木の墻

そうゝえて遠くふそ。丈夫ハ高くまゝ直く程の体
と見て。案内の子供を呼び丈夫の宅ハ大畫う。そなたの
方ちやア垣根ぢんざア。隣ぐら程のやうなハ中く
一通りの農夫ぢやア有ハ「ヘイ」こなたハ陶後の黄表紙
とまゝ見て。こるも千石ばかりも程有。まア此屋
でハ丈夫とやてをりまん「ヘイ」為ぢらう手処でハ。
その宅の維を呼び度ぢんざア。手方働らいて見めへう
「ヘイ」そなたハ「ヘイ」仔細どざうません。丈夫の所も表張貴

君さまのハ田地でどざりまんうゝ丈夫ハ為ぢらう
ら。隣まゝ有る殺さまちやア困るぜ。何ぢう丈夫ハ扱
うつてくまるやうハ仕度ちんど「ヘイ」手処ハ私ぢやハ
うふやまをうト近入らしゃ。暫くあつてちやうア「サア
此方へ入ッ為ハまー。勿論庭口と開まゝ堂
為ハへとやまをうゝ丈夫為ぢらうちやア何ふうぢ
和尚も一所ふ為ぢせエ。為ぢ雑遠入ちやア。
遠慮ちらうゝ手方ハ。何ぢ為ハ屋ト報


一対の雛
良縁を
導く

人皆そこを処ふ遣し。其樂の地ふ二三個。引れて庭ふ入り。但者とうふ假山泉水。樹木のかたち石燈籠も。其ほうひて。えんどうろうまく。私ども人皆云淋れ。待と云て出帰り。一ちまいく見物さん宜ことをいて下さるまして。ザワまづ此方へ入り来いまし。私どもの庭をとゝせべ。待ふ一度多入いらせべ。然若きうて清らかくこの新茶をべこそ茶の色も。まこと一ちやでどざりまいぐ。イヤハヤ伺の様も書ざるのお服ふふまこそて

あいどざりませんく。丈夫方様でわ人のサ。樹木屋どもがふとかへて。稚くふ遣つらう。都て緒の花へ所ふ甘美がある。そして此処ふ出ぬ出月が宜うう。トキニ四五人今月押多ふ。大勢系つて乳の毒ざう。実へ所ふ。そこ所。雑隠ぶ立派ざう。そこと考波一見しまふ。まうし入ことゝく釈サ。モウ笑て構ッこうりゴヨ。そこで。その雑さ衣と。篤ちうこせて。お異ふ。セエ「イヤモ兼ふ」ふ偶人。ちう。衣個の女児ども。朝小晩ふ拭摩つて。今日

まこと茅の事。かしてゐる的殿ふ。いさーこと積つでおざ
アませうが。根ゲ宜くどざのませんゥゥ。乃境の甲斐い
どざりません「イエ〳〵おふ左指でれへのサ。とゥゥ上りて
も宜しいうる「よの所でどざりません。サアおよう指ゲ
まートいの極類の階ゥ。対変へいまべ変らうふく
二間ざりの雑段ふ。あるいは縄ま指く縄。古今綱の幕
おど。ゆくふ行つて。藤るもいの〳〵古今雑。さて五
乃具ゥゥ薬笥長持。行笠指ゆう。そ阪の綱

及義百石。所せ乱まで並べさて。嵐蘭の菱候大蛤。
栄螺揚栗厨子昆布。さて徳蓮ふい種〳〵の心祝
ばくせ献立おまや。行ゥまーゥゥ〳〵俵へてあり。丈右
衛つい精くえて「イヤ行とて立派おあざ。おゆ容徹
どゆの心おさ。今日い茅句で女児ゆゥちゲ。折ゥく指ゲ
とゥゥ処と。行邪魔と入ゥれちゃア。さて今決ゥ筆の
天宮へ拭ゲゆ六筋もかつさ出ぶんどノウ和尚サア早
く出ゥけやゥゥ「実ふ左指でどざりまん「まゥゥ宜

あうございます。只今お菓子を一ツ献じやうと。女児ごもが
まうして居ます。おうく帝ヲ拭処ぢやアござります。
せんトいひ々其樂ガ秋をひく其樂いさうえ身を忘
れうと。覓兵湯ハ小勢ヲ去ろう一実ハ又邑ヲ茅場
とまうして。淨ろう繕ろうがごとうます。今日ハ長ケ原雑
さ衣の四光ヲ。二ツ段繕ろうせます。先刻ハ
て脱のと。始める所でございます。且ガ入ものの
で控させまーと。ユモシ仏もい慰ご。一段繕ろうせていい拵
でござります。まうしてやア強ヲ頂ございますトい
ひ々こまと紙繕ぺ。丈右衛門ハ。仏幸安ろの
とつふろう。俄ヲこの面へ燃ぬ。おろうの毛穂数
き。こる落絵の見素ヲ。こ強を居かけば頼てころ
茅場ハ。年丈ハ。ヲ十の上を拵え。小一葉ヒ一義ちガ
ら。匂ひハ迷ろ系勢ヲて。人々ヲ一様かを。落ろうで
きて大振神。絵の掛振も所郷めろまで。こる上ヲして野
丈ろめヲ。ろの人形も筆ハ。ろへ。後紗ヲ載ろ天目

右手を副てすらく玄出逸づきて丈右衛門ふ。さし
出せバこまへとひて。把る所を逡巡。あふ子を落て一
緒かを。其時宮下覚左衛門も扇子を突き「不測あぶ
熱類女児の嬌しきものでござりません。お謡わくまで下
さりまし「丈イヤ左様うエこまへお初ふ。今貝へ不念よ挑
みて雑さ女の邪魔を蒙りし。こゝお菓へいおちの子
まへうエ。頭と人もつて樂しみござる「覚イヤハヤ稀く世話がやけ
ます。樂しゝ許おやァござりません。トいふ大そうこまり丈

振袖の節句の親式ふや節も小袖も燃出づる。
折数ふ裁よる万古の四ふ口坂菓子の登し我閲
き。是もまた逡巡。あふ子を衝て一緒まゐまし。覚左衛門
もまた扇子を衝き「覚こまへ次娘ふござりません。今術
者とバ舞るの神こまが。麻耶とおつけあさへましさが
年をのしまして女房人が。縁ふ名ごとやまして覚左
耶麻とまうしゆへ「丈ハア左様さうかさぎ人ふも。お麻耶と
いふ頭数のなかのおかご「サア時ふか婉しの。深きうと

あさうませんう。行ぞ遅日でもモウ彼是申刻近くあう
ませう。「行ぞ徒歩」しませう「そんあう」葉清さん
お頭ひゃひ「支ちゃァ先刻の四海文五う。今日のう
てございますう。山の段のふいてーゆせう」デンデンく

第四回

さうあぶふまい家ふい。姉のお橋ふ妹のお耶麻けんとされ
うぞ美姫ってる。うの袂をうき食せ。孫まおきて貌
さんいと軽盈ふ整頓て。坐ーるさ衣へ立を山の。花の姿

も行あうまぞ。殊ふ待渾半下がまで。こうふそまーくの
衣裳ふ美て。左右ふ後ふ居ふがれて。挑の節句の紙
祭う。現ふ妹ふと撲ーうて。こるさい西大多屋丈
右ふ。仮初あがう後准備。又所ーてあうぶまとど。
今と壮の美春良姫ふて。如ふふ粋好うる風俗。
例妓ひある文代ふ丁稚。因き天宝といひあがう。甚
楽い風雅の乳頭あう。傍ふ人の見云清ぶ。西
見ふ祝ーうる系勝い大判幸ーうも評ぞべー。かて紙

なく浄瑠璃か三味線やどやどやの騒がしく。芸者衆が
休息所と入る所に。娼妓女郎が揃ひて持出せし大広
蓋へ。其中に居並べ侍女が次第に運ぶ吸物肴の膳
下に並ぶ座敷の旅客「コウ〳〵此主人じやアお約束
が出遅れてノヘヘイヤ何も百あるものへござりますせ
んモシ宗匠さん殿方がたもう客も処へと宜やうにお執
持と然ひまして「ハイ〳〵畏りまして然らば私どもまでに
御亭主恐れ入ります「今日いつなる日か呼び寄せも苦しう

各旦那さま方の御来臨下されまして。外に御吟味が身にあまり
まして誠に有がたうござりまする。然どのやうにも
御馳走と。申しては存じまする。何振も総気とち
がひまして何でも急山の名に合ませぬ。其処は都の
珍ありさ。御免なすって下さりまし「何振も〳〵
左様おつしや卿が外は下酒は総会でも容易にはございや
ませんよ。モシ旦那この鰯を御覧じろ。鮮鯛歓上の
時あるべく。ぎろつと一折で五千ほどもありまし〳〵丈「さ

振サこうやアこんつのおんじゃ。サクく千そこ処でいち橋もお
耶麻る。千振ふめらしてぞくり居おいで。此方へ来るく
下酒でも振ま。コウ和尚さまく小。取てゆくりておくま
「どかくお美い女中元い。古振もくしても急ぶ発
居おさくくんが。エ七。まと千処ぶ千寿元寿の群英
ぐあてで。術振も定章ふも。出ると振へ所がありまん。
くく「こくまお橋もお耶麻もお若さ女のやうふ。と屋お
いで。チトお敬でもしてあげおいう。形ぶが大きくくても一

向汲ふ立ませんくく。ト此うちぐえく殺も出。出ると
教年あまとべ。八くく七八分の鐘を聞きふ。ろ浦春の日
の長けまど。さや夕陽沈くくとして。銀竭輝く紅霞の
紙。紙段へ張さくふ。燭蓋を洞いくくと。怡明
まで小顯くくまとべ。接海棠桃山吹連光椿の花き
へも。蕚くく乳色の法如べ「イヤ一向乳が付もんぐ。
猪とやもう人呼で一盃吹せやうぢゃアおいう。ノウ此う人
「へエ古振ま。ぼませくう「そのとく茶猪さん。オイ涌る

てのお師匠さんが〳〵こゝへ出かせと辞を行れの大きな
樽。蓙を行ち荒示こと。出来りて〻〻処へ居り「食さな
耳ゝ百ぐらほど」「サア此処へ出合せを」ハイ〻〻〻
ませうそうしかもえ承知人ト把る烟酒瓶を押へられ。ぐ
有もたもと流らまて「男ふまの中人い嘗然。そんなう
来ふいてぐれまんが。乃返掠をいて〻〻ヨトう滑中年女
のたゝまふ。打て搗〻〻料理の張や。浦嘗のま
ぐ蓬莱ふ。拵び〻容いたゝ拵ども。あいえ見とあいそ

ぬ見ふ浴まてうゝ従い帰ゝ行さ人宮ゝだうゝ大酒喰
ふ小欲更ゝうゝ大の内丈右衛門ついんづ見。岩見地ふ
長居して都内もさゝて遊戯ゝ。芸来帰らんと
いひけまど。強金までい三里の行程。夜ふい殊ゝ疲ゝ
ろ〻。さまびとの者ふ旅舎を索め。翌朝ゝ〻〻帰ら
まで。つと汚ゝ〻〻有ふ。若〻〻びゝ一同ふ海ゝ
ゝ人と覚え清ぶ。つゝと続ゝ続ゝ。晩ふ酒ゝ上ゝ
まびゝ。夜明〻〻欲とも仕弾い。とゝまゝう亦も遊客

て際もわびしかりしまでこの歌舎ぞ美濃しかりてそ
の秋も明けはべ。朝顔も果て文も果つ。兄弟父子ふ
稀と述べこそとこいで借りつまて。遠金へ帰りぬ。か
ばい耶麻が煩いこの頃来るお好き蓮ぐ比ひこ遠
ふ繕ふ。渠等両個の中ふ。渾家ふおひとも来
へあるど。といふ中ふ。妹ふ耶麻の方こそ特まれ。
紅葉漢ふ入はぞや。と心ふ深くいおひ人ども。只級初
ふ人こる女児と。如此いこんも行ふ。渠乳と人の繼ふ。

殊ふ彼方の心も知はぞ。ながその容を探らんと。
ふ社二綴。ふこ。鮮菓子。その代の安定の新。
その外脳結ふ拵ふ拭ひ。沈元綾白粉ふんど。結女達
の姉女ふ頭あこへこよと只達ふ心利る仲居の女。
こくひ合あて彼ふ。かの。ふ長持一挿仲居ふ戸
の。ふ家せふ彼男二人とつけても。獲風利の人地すま
ば。其樂と副の便ひとして。陶綾の郷の兄弟清洋。
せこけふ。兄弟清父子ふ出むへ分ふ。紛れの

品々痛く入る口接拶と仕ひの女いつも変わり手楽い
去の須川楽とかアて心易さもまと別座供の男の二人
まで。稼く稼く歓待う。其楽い第ロ小接員多く。人
の目色で心を曉る。曉き性のあるまゝ。去の極丈たつ
胸の中。大うさい推察。今日この所の若副。城すも涼
き心とい察するこのかるまゝ。茶揚さんの宅い行
処でこざりますナ。わゝ用ロもあり世るの接拶。今のうち
行て来りませう〈イ亜を処でこざりまん。コレく利十や茶揚

の所と。多後の楽内まうして来い〈丈ゝう行て来りま
せうト利十ガ楽内小表の潜つまア。開てその見べ〈ヨヤまア。
ゝく入っ来いまーこな。此ゝ洋小モウ。変ゝいゝまさ。
あゝ已久ーぶりまでゝ入の敷延ゝといゝまーこョまつ且和小も
ご機嫌ゝう〈イヤモ波時ハ大遠辞てる。孫ゝされこのも九
で有ゝまでサ。ゝ波ゝ入ゝるやア。隆義いまア出来ねへ〈私
も仕家ゝやア。行ぐゝ夏中小ふゝりまて。且和さ家も行ぬい
孫ゝ。そんかこも存ません。極ゝぐ悪いぐやアありませ

竹華ろ
米ち
山椒

其樂
華勝ま
放耶麻ぶ
縁談を
えろは

んろ「トキニとのやァ旦那さまが行ぞも肴でもあげるのだが。サテ
遠方で役利が悪いからこの頼なから此なから。何で実で上
ッてお目にかけせへとよく云訳をしろと云て出されましたト
懐より出して是処へおくハ三歩ばかりの色こ紙「こ是ハモウ
ねよろびにはおわりがとうございます。どうぞ此段宜く
御礼を御郷で申ておくれ「トキニ華様さん折入てお頼み
があるんだが。と申て吾儕の隨意にやってお目にかけせへといふ
のぢやァねへが「ヲヤモシ万一左様ならと思って此のうち姉さんの思ひ

とつらしましよョ「トキニ気休めと知りながら様よ為難工の
上るが。其処で子華さん彼に狭いが。此人旦那が不意とお
ざつて覚云涛さんの女児のと交個おかつて初とつふと性
悪の云うぶが。実ハ妹のお耶麻さんに首ッたけとの理屈ざ
ってなから堅いお方ざろうぷロへハいお出しなさる。糸へが其処ハ愚
老が数年の功で又抜さア万遠あし。其処で此方から彼見て
と相談まづやァ宜けれど彼ハ姉さんとハ後遠ひで義理
がふへとつて婦ぐシテ見ると姉をさしおきまァ主人も同様

か。大家の大家へ嫁入るのい。断ておさらふ遠へ行へ
左振して入ることをいひて。跡ぶ無味うけぶ。此処は一寸数
行ろうの。執向ぶあらうとおりふのサ。紙幸筆猶さんか
おの物で。一巧夫して御呉おせ人ヨト仕て莞示「コヤラ先ぶよ。
吾俗も的吉利左振の出容みとえて取らい。お振と
桐巧ぶ祝ロ「左振ろいおも左振ろつう。昔男人の服装い
外れれ人「そうやァおお振のおをおるる。お耶麻さん
い笑現ぶらいめヲ。ぶうしも〳〵姉さんの先と紙て。お縁付

のお気きびろ「サ。先さんぶ宜つやァ宜わど。拵〳〵承紹
いあうきい「おの考へも矢張左振ぶ。夫ぢやァまァ
ぶうしさう宜らうトつまて指く考へうしぶ「アノウ
むうし行ろうの。唐の王さんぶ姉妹女個おぶう、お后振
ふふすうさとの新を使ましさぶ。大多屋さんも四大家
のヲ。お女個おぶう、おろ「孔とつ。次ふやァ仕ましまいう
「そうやァ二個ぶ三個でも。千処ふ少も好細の振へぶ夫ぢ
やァ覚えを来さんぶ不承知ぶらう「ナニ千処いまと吾俗

が太鼓の敲き中うがあり。ちゃんちゃん。かち拍子の入沢ふか
新しをおさいナト其樂ゞ耳ふロとよせ。段物ゞ続で
きべ。わらゝく其樂ハ点ぢて「そりゃぢやァ今夜泊ること
して堅の朝飯ゞふ」「アイそのゆうゞ拵ごと云て。吾倚ゞ
そそ処へいきまんゝゝトその段取を塗らひけて

嵯峨の仮寐巻之二終

雪迺耶麻

嵯峨の仮寐巻之三

東都　松亭金水編次

第五回

大ゝハい橋ゞ多会ふて上の間十畳次の弓六畳。然の
こ廣きふあゝ松ども。上の弓ふハ琴ゝ三味。あゝひい菓
子具盆画の具。花瓶も好ふ紅ゝ。新形とさ人徒
立さセ。ゝゝ花ゞ瓶ゞハ並べゝて。こゝ成騰ゞ好
ゆバ。二弓とも淋ふ。孫といゝの異地あり。父芙蓉清

いこ人来て「ハアお橋ぐまこと並べさ。人の来る所でおーとも。楽かるづけて並べ宜。トキニお橋。其樂宗匠ぐ。且お母の伝ぐごと云て姉妹を近く寄へ通ふ。瑞念へ通ふ。

云。お拵ちゑ芝居と指めこの節ハ法所よ。用帳もあり。花えハ勿論いろくの。慰も多い内節ぐ。チトろよ一所よ遊び度とぞふ。云て城ーおすつこぐ。お拵ごいおぐさ法乳ぐあるちゑ。十日だろも通ふ。法ぐ宜らうとぞふぐ「ヨヤお拵でござりまえ。私い

ずだろのさ乳。瑞念を云ん。さまと内。歩ふ笑々えてちゑりません。い形麻さんおおいまぐ。瑞念ちゑえでおいる「ア」嘲ふだろ法て居て。どんお所ぐ「度ハえ云と。ぞひまい「手処でおお方ぐ法く乳ぐ。手横つで通神をちゑ。歩ふつまぐ「橋ちゑ行ぐう可笑やうぐる「行坂橋「おぜと云て大多屋ふ。内新造さ及でもあまべ宜ぐ。ちゑやァ縛ーの四寺宮人へ来いぐらうぐ。いまで男一個の所へ泊ふつのいまへ

光義「右様へべさうごけまど。実に構うこともないの
サ。まと世方うも鳥吉や馬遠。その代女どの御人きる
やうふ仕やうう」「まらう彼地よへ。突さ変がうる
と宜けまどトいまと相談一変せる。所へ隔紙さうまと
開て「ヤヤ方ニ個さ表ふ入ッ表るうエ。私いお橋さんふ。
世お新しぶあつて高りまと。然ー行ぞ。お会合う。彼
方ふ後て居ませうう」「オニ」「内証嘸しでも行でも祝へ
のサ。遠会の且羽の方うう。表個と海ふ紙せと伝切の

お結会。そ処でまァ世さうぶ八分。表ー彼方ふ新遠
ぶがいうう。可笑やうぶとお情ぶらんのサ「ヤヤ」右様でご
ざいまんう構うこんおいうう入ッ表いナ。百一いうこと
ら表壊を突。表ふ。おさう表と祝作ふ祝まま
せん「ヤヤまァ居ふ茶扇さんど「そま」ぶイァいお様
お稀でございまんうトいまとても表云て居る「まァ
表様ふ審武ハ除て。誰ふ宜ぶァございませんう作
私もお結をいま七。芝居ふ開帳法方へ来てこら

何の根ッ子面白うございますせう。モシお嬢さん方ガ入ッしゃ
るまう何卒お見物私も。お供をさして下さいませナ
まさおが仕て くれとアやア。出方も大きッ子安んじゃ。サア
お情ッ子耶麻どうもる稼ぐざぶく拵て其樂さんッ子拵
拵をお拵へぢやアあるまいか「何でも入ッあるとおさい
ました。さて入りのハ三里ッ位でも腹わどうガ宜おけ
りやア出られませんとト只管ッ子勧めて見バ。お耶麻も
頻アッ子仕てあるう「姉さん仕と。お拵おさいナ。まへ先番

宜ございますせうよ「いおぐさガ仕ました。自己の方
ぢやア構ッ子拵へ「丈ッあるまいとも宜ございますせう
ッ「宜ともく 仕ぢやアッ子「そもぢやア仕といて
ませう。茶屋さんも張ッ子出ッ「ハイ来ッまいもく
美味ッ子張方ガ拵ざと拵作ッ子べ私一人でも其ッ子のお拵
あッ来ッ子ッ子ございませんハ「ひおぐさ美味ッ子ござう
とう人宜ハ「丈ッあるくくをのこと宗逐ッ子ッ子ッ子
てもく渡ッ子を見遣って「ヲヤ茶屋さんそもぢやアお

おいッパノ且那ふか恢まろ「コリア」稗ふ壞ごノウ。手紙とと
「文でも茅場さんが一個でも沈くとおゑごろザ」物
且てこ陰ぢやァございません。強ふ著こぢ。て姓ぞ多
好男で。そして莇のよ多いぞ実ふ大家の具ねざふ
波根のいございません。あの方がふ金ねでちけるやァ此
多のこれ私ち惜ふちろまんけまど「紅板ェふ金
ねぢろ。宜ぢやァふいろ「祈が安徴ハ人ともづつて秋
婚者であります。そ多ハふ年も若ー。茅場が様

小若て。ふうみさあんぞと云ふ多ア。沸ふ稗でござい
ますッとハ扨手処へ出ふ。そ楽ハ覚系「
奥四度へ来ハ若ふ入ける。師匠さんもふ出とはさ
ろ大事あるまいと自己で許て古へ湯場と来ま
ちた。ふ嬢さんぞ四光ふまーヨ。ふ強金四返面の
四和流ぶ扨ふまーと中て。私ども中ぞ偶ふ焼
て和中せん。今ッろ一四龍ふ。帰て。ものと中ちぶ。後
日ハ豆ふろまでふ。ふ近の人もふ多。石狩浪様

おゆう

おやま

つまんべんなく。その名をでかしまして。今月月のかもの花ゆ
まして。つよくいかと。極うまして。かも花のやうも。宜
やうかの新こまもの人。長袖もいかをつくを持うサ「大振を
をつやァ浜崎ご。丈ぢやァ吾袖へ一見もそそく帰りて。
旦那よ左振いたまをう。さやうかいかの嬢さんがご。茶屋
さんも明後日ト接拶をまへ「まを振を人。そまをぢやァ波女
中も西一所ふうエ「さをうサ踊をもはまをへ「丈ふう
お耶麻さんいかもいかをいかを振ををてあげやうトかの浜金

ふうの仲居ふ。ふ対のかど稼ぐ。海を迷
て返し考る。ふ浜金の大多屋ふ。このことんを
一ふ楽が打らひて。感がる丈屋へ大ふ踊び来る迎
ひの准使さを。智二挺ふ紋頭夫個仲居かよび芸妓を
丈ふ子屋ふ。仕茶屋ふの紋いて。楽を副
てきりけ。まを此方ふもその日ふ丈屋の浜新大ふ
さふ。だ。依ふ惜のさ。改高ふい先生愛馬道妹ふ移森の
さ高ふて生愛鳥吉侍女姉女。ふ人きつを持ふふ

て上下の准備をなすに拵へ迎ひて。他の人数
動也。こと。端舎より茶に けまべ。まと器のゆゝ
て。こで噂こと 動揺り。かくて双方の浮文多う。遠会へ
茶けまべ丈右衛つて出むひて。山須の稽ごゝひ。さ
て夫個式同ト所に。措も容易きことなゞく。却て混雑
きるこゝ。来て丈右衛つゞ物数多ふて。御居の
方に補佐し。新社数に間のゝち。脱に二間へ右好に蓮
とさしきて二つに明ゝう。さまべ列の方へ当に。月城

紙んと賀入りるふまべ。庭の茶木もそ見に沢ド。ゆゞ
名も初ぬ緑のこゝよ。雑に蒔るも茶門ゝう。茶の
園は義千楳祇も茶ふの沼をまつ。風雅ふゝ松ど
折に悩ふ。百日紅も隅に植て。見とそ秋と義れる。月糸
城ともつべきのこ。右情をべこゝに搭き。妹に移麻を年
丈人も。実に蒼の花ふゝて。事表に春色て義りさ
る折に なまめ。さまべ遠舎ゝう迎ひに沢さる。仲媒ゝを
そ事に。遠に こゝの子舎に居て。偖て茶ゝ堺

安とかゝりひて閑を達さて。よて常待い二間のうちつゞき
小座とも勝手次第。勿論廊下つゞきふて。夜具とりふ
汐来い易し。その頃い廣ふふるうち拾ひ。地もの科
ちゝもゞふて。楽しくいさんもくゞしかゝて次の日う
芝居へ拾。あるひは花園帳場へつまゞ時節つまけ
まど。樓私の縁しあり。日毎ふ欲枝に人と拾うざること
りあく。まこい幼女の女通打を呼ひいこの頃名ふ言ル。
海ち更風呂ニ及ひ。丹光秋ふ此沢一ド。こま雪の清

獨寝ニ法いまこ一度の餐まあり。その他遊枝美さの嘶
ー。河久九ぶ拾の曲。新内節ち差常春の。こ者夫と拾の
ヒ。其朋ち遥ふ別ふ。その後の蓋人取久引換へ
拾ちて欲毎の一身ふ。月日の移ちけ人ちまこ供ニ来
ちーて籠を拾ち。堺女小奴い事毎ふ。ちき出ちとく人
ちまく。遊金い艶華の地とかゝ使ちちまこ。
かくまで張ち人一世界。実ふ鄙ふ住ちのい行の周果と卿
ち。喜見城ちこまこちん

第六回

ご後初にみ七日の追善とおもひしも。浦嶋が子の故事なれど。明暮る日も覚えぬまでに。六十日餘り過けれど猶も心に晩さぬし。今日は朝より雨そぼ降ていづまも少し徒然に。お山麻は空とうち詠め。侍女とえやりや「山へ来てうちまで淋しく十日ぶりうと岩間さがつ考へて見ると翌はモウお秋逃さ衣お振して見れば一月の餘にあるノウ。毎日〳〵おりかハるとおりので淋ま

日の〳〵川のも細うあんど。先爺がさぞかい淋しくッてまちかねて入ッおやらうトいふまうちへ入来る業猶「いお山麻さん何振枝でしよ。今日はちと御退屈でござりましう。今も旦那さまの話仰にハ夫が浮て淋しいからう。新家の浄るりが何ぞ旅やうなものを唄ふと与論がら私がモウ新家も浄るりも大底上手なのハ御存なお技がかして、おなくもあるまいが。今日ハ久しぶりで御師匠さまのお奏で。お咄ぎすが宜でござりませんか。お嬉さ衣のかなら

弱麻さんのい筆あり。実ハ銭ハ遠さんと。やしらるらべ
をまいい奇物。とうぞ文を笑ふ。左様まうして異と
流行はと「ヲヤまア茶番芸者さんざ行でいあり手拭
とゑさんざ。おそれど拭さんいよくい洗ざけまど。各
徐い絲ハ出来かいう。外笑がうるいれ「さんざ」紙
流行さん。左様中ーちやア勇ういどざいさんが。お拭さんのい
心法ふり。半嬢のい筆ず十隠も上でいあんまさるあ。
まんで外笑ず勇うございませう。半嬢い絲ハ紙事も。

内端ふて周りまんい。行の構ふあがありまして。
行ぶう文でも可笑ふう。行辛ハ断ふとやておふとナ
「ホニ」モウ周りまんい。強ハ出来かさふあい所が活
業ぢやアあるまんいー。おんのハ風でいりまんあ。
壁も乃ふ勇いありません。今ハで乃ふ者と拭ぢて。
山拭ふいふふハ出ー拭ぢさかいで。行の為でぢぢい
まん。おれの弱いも程ずあるト理を法ふれて文ふ
ぢと。まふ亜利のまを。その頃小ふさ。

お嬌へをまよふ迷ふ人て。その噂を聞よりも今日ハ一世の
晴の姿。お杉麻ふ負てハ姉の威もうすく。久しく撥を
手ふとらし捻べ。日来ありしと侍女ふ云ひつけて三絃を。
とりて出させ調子をあはせ。容貌ふ弾なして其
曲を後てまで君者もちきりふ登りけれバ史君
演つへ人を寄らせ唄ふひゐるど咽よりて頓て替の
説優さ人恐ひぬれバ広座敷へ。毛氈を敷つらねさせ。
上座ふ出て筆を三絃の次ふ又並二ツ。むきて並べて

去来とらへこふ称て。お嬌ハお杉麻とも。晴の衣装を
着替りて。粧しと出来ぬ。面々あげふ対ふつけバ筆筋
へ命副して。稽古して処ふ居らせつ。まづ調子を合せて程
小唄謡ひも出来りて。対ふ着なるゝ一様なし。かの調
る節とらへ人の程て。琴の調子を試くして。謡の出を済
妻ふ澄ふ限る安宅の松。唄ハ元より筆と三絃も。実ふ
心耳を澄まして。ぞりぬる。次ハ色音ふ居なしお人る
感激のかたりひをとなむきて。称筆を常まるとそきせ僧

にて聴ときハ三絃の音ハけをされて。琴や尺八やも
定らずありしぞ。因て三絃二挺のこれを箏三面をもてと
是に敵をて。若しからバ、お野麻が爪音ハ番通しまふあり
ぞ。なそで箏一面をもて三絃二挺に敵すべし。或ハ若情ハある程
てその爪音の揃ひしを三絃をあるもしふハ。今貝ハ一際精を
弦て。撥をもなりゆ操り得ども。其程の音色の段ぞべし
して。指さ箏ふけのをさきて。心地のごかにけれバ。悦をれをて
まど快ろしぞ。然なが人々の三絃を積るふありて是

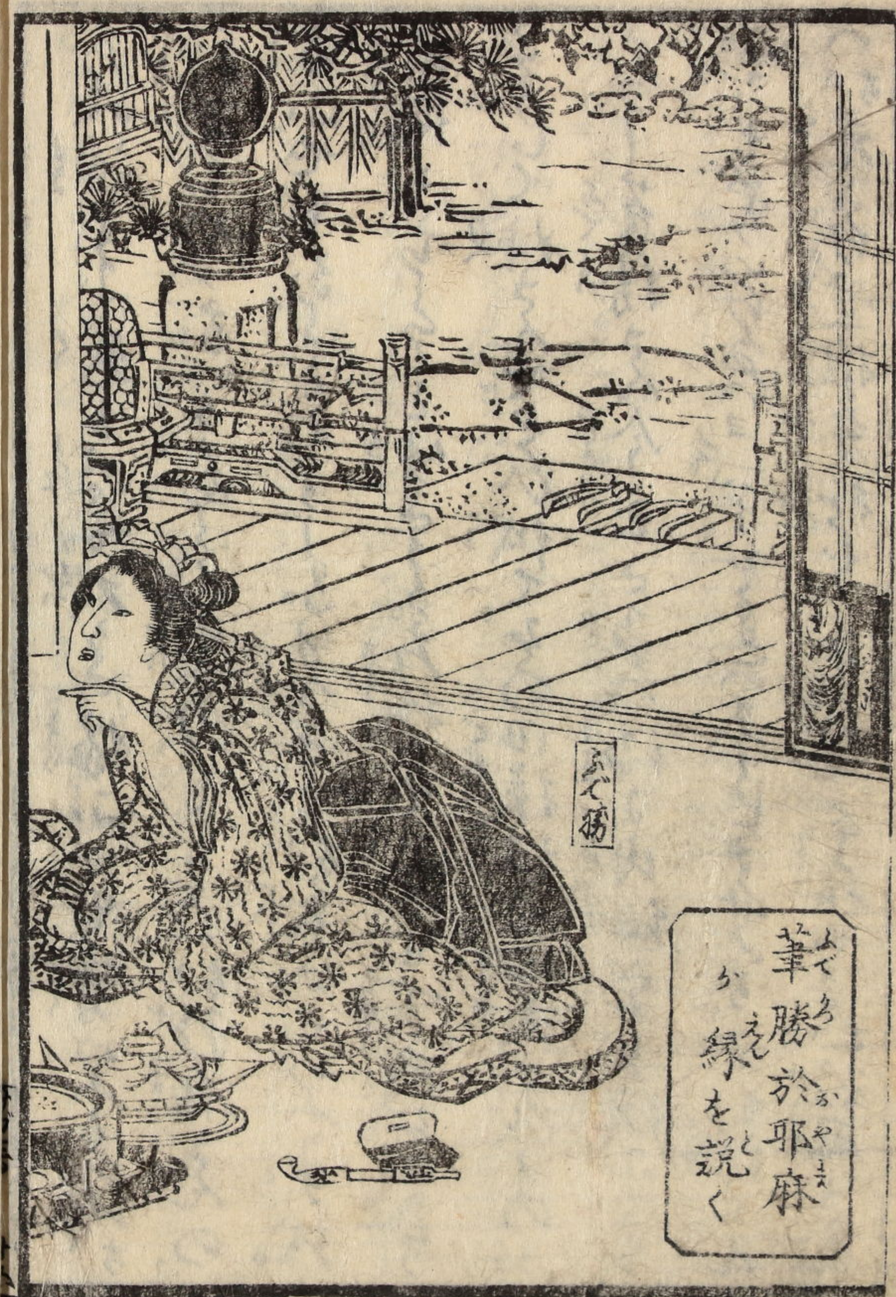
ふ心を慰さめんとて行ふ流行の洒殺剣も皆らぬ多と
なぐる所せきまで座敷なるべて。や酒宴と出るまは。
此頃聞ての稽古にハ得しに交りける。〇ハ猶道楽も出来
をて。その身代削るわざに一殊ハ積ら。〇ハりけりかをて
その黄昏にその席も果るべ。〇其上く今会人帰り衣
顔なぐ若えて妻時甘ぐその極の其様入まへ。お
野麻さ夜をひろしぞ。〇若箏が多く出来ました今も且将
さぬが甘んぜしも。〇三絃も聴て宜が。〇お野麻の箏にハ

実恐れて。行水して波深くなりぬと。熱と注ぎ
かぶりつけたるとうえうふ。あるいは夜食あるいは。風呂へ
入るもあり。茅場町を横ぎり来りを使使。ふ五さ五べ二
人ぐ紙よ人を居ぞ。茅場へ蛍示と笑ひふぐり傍へ
ま「モシ」お移様さ夜。半嬢とその且那さ夜と。若と言ばん
ろまと称ごと言ばめしゃんろエ「行ぐ夜ま」をう言ふ武か
ぬぐなる。そして行ぎまるのごエ「どうもいくまんぐ。ヤア
見ーなと。かぬゃんのでぐらいまして「洗ま若ひ方ごョ夫」

ちいまるいでも「紙ま」とるサ「実ふ大根ぐ」ちあう。
そ処ふ新ぐぐらいまん。先さ夜でも半嬢をば沐ま髪
て入ちつて。行幸おらうまるう嬢ふ若ん。ぐ夜嬢
ぐ行ぐうう。丈次郎で親ひの方へ。行根でも新と分る
う。ヤアひ美人の見ーなと笑てくまるうと私ふ閉くお新
こぐぐらいまんう。丈で。お笑中まんぐ。丈ぐうぐ半嬢ふ
ぐまふ。おまう拝ぐすぐぐらいまるうまんいんうけれて
年ま行ぐ。まづ和らしさぐまん。顔の半と社ふて

掩ひ。類のわらうと綴くして。重箱あり。「その名」
いつまでも有ぞうのやうぢみまど。マアお止ふ為るやうふ。為ち
先拾ひておくまを。「まゝ」こそまぢやア紙ふ何処。入ッ為やう
うの訴ぶごぶいまんろを。「十二」何拾ひてそんふ為ひが。「まぢや」
半壌ろうまをせん。この為の為きを為ふ成為さうやア。半
壌ぢうう親ぢさ為ぢで。何拾ふ置ッ為まをせん。それ
と止ようと決ふのへ。「アレ」で先拾ひてさうぢみまど。
おちもよく知ってる為ろう。お悟さんい筆理ある婦さん。

ちゃん泊ふ来る為も。大ろ嫁ふでも貰ひふとろ。お
稽ぢまぢやアおいう為ろ人。支ふりてもモミお移麻さんの。
方ふでもおろと為ろふ為ぶんぢとおを為ぢとふる式。
君後ちちろと笑ろ。先拾ひて入ると下成その為。
ぢうして姉さんとまび紙て。その四接扱が紫ちんの。
為ろ茶猪さん今を為ぢるへ為ふ内紙ぢう紙ふでも
嘲ーちやアいの為ヨ「バイ」をまふまうしちゃんぢ。フムお姉さん
いい年ぢけ。世拾ひを拾ぢうろねを。そ拾でるお移麻さん



筆勝於耶麻
ふで　かつ　や　ま
緑を説く
え　と　く

ほうぼう探がす。お松は仲小遠びかいと。考へまして。
直ぐさま。そのあとやうす。つぎ夜まえも。むこ。更ち
まア親元の方へ仕と遣て。お個とも。葉ひ切りと。法仲て。
この頃中二回ほど。お仕が来りまして。祝ひさ夜ハ。お清ハ。
処で。お個のうち。ちてんぐでまとべ。此方のお疎取と除て。
お親里の方へ出世嗣ハ。あげ捨ぐ。捨ぐ。その。あと。寿か一
万両と。田地ぐ二千石ばかり。ちゃんし。丈ハ今。えへ。お遣て。捨べ
そこ。ちゃんと。出来まして。お松。捨て。えまべ

見うへ。さで。出家人さ夜の。必ず。ちと。ちとも。お姉
さ夜ハ。ぜひ。捨ぐ。捨ぐ。お松。ちと。
ちゃんぐ。お松。そ。ちと。姉さんぐ。お事で。奉公ハ
アア。お妻ウエ。「イエ」。お松。とぢやアござりません。まア
出家ハ。お個。おぐ。出家ハ。入ちつて。おさ夜でもお
出来。おさまべ。そ。処で。この松。ちと。拾やうと。法仲。ちてござ
つまんヨ。「ヲヤ。そまぢやア。捨ぐ。悪いる。ナニ。奉公ハ。お妻と
つまと。こって。夜。ちアア。構ハ。ハいぐる。お松。まべと。悪いけ

まど。嫌さんへ氣むづかしい。高綱殿と一所ニ居て。
まく〳〵行ぞ遠でも苦しうと思へと。夫ゞ今ゝ氣ニ
なるヨ。ちらつるゆゝ宮殿をべ。宅へ帰りてやさうニ。
おお方振をして。お長でおいら一行振して左振いと来りゝん
まの。既ニ半嬢ニ。お傳まうして来つて。鳥居ごんもそ
の様ニ。視ひさ表ゝ四ぶ法があつて。今朝も云て
ございまーと一方振ゝ立てまぢやア給方がおいるよ。実
ニ。ふすへゆへ宜けまどト嫌しき中ニも泣きれを。紫ド

るも又おゝの情慈後ニぞおひ合ひる
作者いまゝこの本文へ。報逃八相記と仮字書ニ入
物縁て見ゝ。現ゝ大通具大機関。後ニ入
ゝ既向ニて。繋ゝあゝ筆の毛の。ニ本見ごゝ援
智恵ニ。及ぶ新の多ゝんと。ゝ多ニ。ゝ
さまゝく。拾元一回既ゝふ方ん。ずもこゝ
道正光の段ごゝ。ゝ。ゝと面白き新業あり後ゝの
巻逗留ふく。

出板仕ハ

世界の人おもひ画かも。粗著をもてがいきごとをもて開て
その名を抜出して稱賞かぶるべし
西往道の内仙楽國の守臣善覚大臣　陶綾の覚を求
浄飯王の重臣日光臣　光芒菅　実右清つ
仝　月光臣　仝　桂　芳

実に月の光を仮て桂を月の桂を仮る
その隠れ抜て出て故頭をもり後小男にて肝要なるべし又
その名を抜撰べ

嵯峨の仮寐巻之三終